

## ネズミの爪跡が残る 弥生の壺



今年「ネズミ(子)年」ということで、ネズミの爪跡が残る土器を紹介します。

この土器は、口縁部をわずかに欠く壺で、胴部上半には櫛状の工具による端整な直線文と波状文が描かれています。また、この文様部分には、縦方向に四本一単位の細線が弧状に向かい合うように付けられています。この細線をよく観察すると、細線の始まる部分が小さな丸い穴でそこから細い線が流れ、左右対称になっていることが分かります。このことから、この細線は文様でなく、動物の爪跡で爪の本数や大きさなどからネズミによるものと推定されます。

この爪跡は土器を焼く前につけられていることから、土器製作後、納屋などでの乾燥期間中の出来事と考えられます。おそらく、食べ物を盗ろうと壺にようじ登ったネズミが、途中で力尽きずり落ちたのでしょう。ところでネズミは、「住家性」の哺乳類と位置付けられ、人が住む所に現れ、人の食料をなん

でも食べる動物とされていますが、日本列島におけるネズミの出現時期についてはよく分かっていません。

唐古・鍵遺跡では爪痕の残る土器だけでなく、ハタネズミ・アカネズミ・クマネズミ・ドブネズミの骨も出土しています。このことから、少なくとも弥生時代前期からネズミがいたことは確かです。

これらのネズミは生息場所が異なり、クマネズミは乾燥した高所、ドブネズミは湿った場所、ハタネズミは草むらを好む傾向があります。このことから遺跡から出土したネズミの骨は、当時のムラの環境を復元するうえで重要になります。なかでもクマネズミやドブネズミの存在は、唐古・鍵ムラが都市的な様相を有していた可能性を示しています。

現在でもネズミの駆除は、頭を悩ます問題ですが、こうしたネズミとの関わりは、お米作りの始まった弥生時代からかもし

### ●コレクション・データ

時代 弥生時代中期  
採集地 唐古・鍵遺跡第33次調査  
発見年 1988年  
大きさ 残存高 37.8 cm  
展示位置 第2室・「土器をつくる」

唐古・鍵考古学  
ミュージアム  
【 ☺ 34・7100 】

開館時間 午前9時～午後5時(月曜は休館)  
観覧料(カッコ内は20人以上の団体料金/15歳以下は無料)  
▼大人 200円(150円)  
▼高校生・大学生 100円(50円)

ミュージアム上面図と展示位置

